

文学家の経済意識と家庭

—島崎藤村と1920年代の日本を背景として—

李 志炯

1. はじめに 一窮乏な詩人の時代—

明治時代、文学者たちの殆んどは経済的に貧乏であった。軍医として最高の地位まで昇進したおかげで経済的に余裕のあった森鷗外、ベストセラーになった『不如帰』の成功で聖地パレスチナ巡礼まで出来た徳富蘆花などは非常に稀なケースであった。世間の人々が文学者たちを呼ぶ代表的なニックネーム〈貧乏文士〉は劣悪な彼らの経済的境遇を象徴的に語る。「恋愛は人生の秘鑰なり」¹という有名な言葉を遺して夭折した北村透谷の自殺、青春を歌う『若菜集』の詩人として名高かった島崎藤村の小説家への転身など明治時代の文学的事件の背景には、理想と現実の乖離もしくは韻文から散文への文学形式の変化のような精神的で文学的な要因のみがあったわけではなかった。経済的窮乏による生活の困難は文学者たちの苦悩と転身をもたらした根本的な動因の一つであった。

もちろん、経済的困窮による生活の窮乏が逆説的により高い境地の芸術を牽引するという芸術創作に関する幻想・言説がまったく無くはなかった。日本式で変容されたものの、近松秋江・葛西善蔵のような私小説風の作家たちに見つけられる自虐的生活の志向を通しての文学素材探しは、わかりやすい一例である。しかし、文学者が創作に専念するためには経済的支援が切実な問題であった。言い換えれば、殆んどの場合において〈文学〉は経済的な意味の本業になることはできなかった。夏目漱石は東京大の英文学教授の職を辞めて東京朝日新聞社に入社してから、島崎藤村は長野県の或る後援者から経済的支援をもらうことによって始めて文学創作に専念することができたのである。このように文学者たちの生活が貧乏だった一番の理由は、低い原稿料にあった。それに僅かな収入さえも持続することなく不安定であった。いわゆる売れっ子の作家であれ、僅か一部を除いては普段の生活に多少の余裕を持つ程度以上の大きな経済的利益を得るケースはなかった。原稿を提供する文学者、その原稿を基にして本を刊行する出版業者、本を購入して読む読者として構成される〈文学市場〉の規模と内実がまだ零細であったからだ。

こうした文学者たちの経済事情が少しずつ変化の兆

しを見せ始めたのは、大正の中期頃からである。その変化の中心には第一次世界大戦（1914～1918年）が位置する。戦勝国の一員として便乗した日本は戦争中から戦争直後の1919年まで持続的な経済好況の時期を迎えた。好況の反騰として1920年に不況を迎えることもあったが、第一次世界大戦を通して日本経済の規模は大きく拡張された。こうした経済規模の拡張を基に日本国民の消費形態が近代的に変わり始めたのが1920年代であった。² 自然に文学者たちをめぐる出版業界の経済環境も多様な変化に直面することになる。このような変化を象徴する事件がいわゆる〈円本ブーム〉であった。〈円本〉とは、1920年代中盤を前後して出版され始めた単行本一冊に定価一円の全集および叢書類を通称して呼ぶ言葉である。円本は空前的ブームを巻き起こし、出版界に大きな地殻変動をもたらした。当然、文学者たちの生活・経済事情も大きく変貌する。では、文学者たちは急激な経済環境の変化の渦巻きの中で何を思考し、いかに反応したのだろうか。彼らの日常は、家庭は、精神はどのように影響されざるを得なかったのか。

本発表は、日本の代表的な自然主義小説家、島崎藤村（以下、‘藤村’として略称）をモデルケースとして文学者たちが1920年代の日本の経済および社会変化の潮流の中でいかなる意識を抱いていかに対応したかについて考察しようとする。とりわけ〈経済意識〉と〈家庭〉の問題に焦点を合わせて分析を進めたい。

2. 〈円本〉と文学者

〈円本〉は当初、関東大震災以後の出版界の不況を打開する方策の一環として企画された。単行本一冊に平均1円～2円50銭の当時に定価11円は破格的な廉価であった。それに円本は「菊判三段組み、六号活字、総振仮名付」で「一冊三四百頁」（308頁）のものを一冊1円という廉価で買うことができたのである。既存の単行本の三、四冊分の分量が円本一冊にすべて収まったことを考えると、円本が単行本に比べて10分の1に近い破格的な安値であったことがわかる。³ 〈円本〉という名前が付けられた所以でもある。自然に消費者たちの関心の的になった円本は空前的ブームを巻

き起こし、経済的事件を超えて社会文化的現象となった。こうした円本ブームは予約販売、全集一括販売などの当時としては極めて大胆な販売形式を通して、大量生産・大量消費という新しい出版システムを定着させた。まさに〈出版革命〉であった。

円本の出発は、改造社が社運を賭けた企画の『現代日本文学全集』（1926年10月）であった。全集の予約販売という新しい大胆な販売形式をとった『現代日本文学全集』は1～2万部売れば大成功のはずが、申し込みだけでたちまち25万部に達したのである。文芸書の初版が1000部か1500部時代の25万部である。当初の予想を遥かに超えた改造社の成功に刺激された各出版社は次々と円本を出し始めた。新潮社の『世界文

学全集』（1927年1月）、春秋社の『世界大思想全集』（1927年2月）、平凡社の『現代大衆文学全集』（1927年2月）などがその代表的な例である。岩波書店と中央公論社を除いた出版社のほとんどが円本製作に参入したといっても過言ではなかった。宣伝、広告など出版社間の円本販売競争は恰も戦争を髣髴させた。それはまさに〈狂乱〉であった。（図-1、2を参照）

一方、作家といえば〈貧乏文士〉というイメージが強烈であった時代に円本ブームの到来は、文学者たちの生活に大きな変革をもたらした。各出版社から刊行された全集に自分の作品を載せることになった多数の文学者が日本歴史上、初めて現代的意味の〈印税〉収入に恵まれたからである。〈著作権〉と〈印税〉、今や



（図-1）大槻保「紙上の戦争」（『漫画雑誌』昭和2年7月）

<p>上宮 ジ永 前田吉千田片佐有 川白高藤豊長木川片照菊芥 田城 ヌカ 田江田田中上慶島 端柳岡森島 村路岡口池川 道 ヌカ 田江田田中上慶島 端柳岡森島 村路岡口池川 仁雄 ソス子 田江田田中上慶島 端柳岡森島 村路岡口池川</p>									
<p>前高吉エ 東宝富谷新崎秋近新池升林笠横野上里三大久武 田 田 ロ 山伏田崎 木田松屋谷 川光口司見宅登米 野崎 デン 高崎祥 虎雨秋 三環陽陽利 小 子 正 義吉風コ 柳信花二出雄銀江格平夢雄一 郎 藤子健雄</p>									
<p>林富太高小武 新野吉千田本片 西原上久藤豊泉 田田城 山 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城</p>									
<p>久碎正雄 男花幸与源 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城</p>									
<p>田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城</p>									
<p>田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城</p>									
<p>田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城</p>									
<p>田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城</p>									
<p>田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城 田田城</p>									

（図-2）「昭和円本役従軍戦士録（上）」（『読売新聞』昭和2年6月5日）

当たり前の出版業界の常識が始めて近代日本文化の水面に浮上した瞬間であった。すなわち、円本ブームは「日本近代文学史上、初めて文学者たちに膨大な収入をもたらした」⁴ 社会文化的大事件であったのだ。

たとえば、島崎藤村は改造社刊行の『現代日本文学全集』の印税で2万円の収入を得た。また永井荷風は、『断腸亭日乗』（1928年1月25日付）によると、改造社及び春陽堂から5万円を円本の印税収入として得たという。⁵ 当時、大学卒の初任給は30～40円が普通であったことを考えると、2万円と5万円がどれほどの大金であったかがわかる。⁶ その他にも谷崎潤一郎、佐藤春夫、徳田秋声、菊池寛など名の知れた文学者たちは殆んど例外なく相当な金額の円本印税に恵まれた。

では、予期せぬ円本特需に恵まれた同時代の文学者たちはその収入をどこに使ったのだろうか。金銭の使い方、すなわち消費方法がその主体の経済意識と価値観などを判別できる客観的資料の一つということを勘案すれば、円本特需による印税収入をどこに使ったかという問題は注目に値する。その使い道を基準に概略的にまとめてみると、大きく次の二つに分かれる。まず、海外などの外遊に出かけたいわゆる〈外遊派〉がある。世界一周に出かけた正宗白鳥と久米正雄、中村星湖、吉屋信子などが外遊派であった。『伸子』の印税でソビエトに出かけた中条（宮本）百合子もこの部類に入る。二番目に、家や別荘を建てたり、車を買ったりした〈購入派〉の部類である。谷崎潤一郎、徳田秋声などがそれに属する。その他、必要な時に生活費として賄うために銀行に貯金した永井荷風、近松秋江などの部類がいた。こうしてみると、ほとんどの文学者は円本収入を個人的な用途で主に使っていることがわかる。

そのような意味で、注目すべきなのは島崎藤村である。藤村は印税収入2万円すべてを4人の子供たちに分配した。自分の子息とはいえ、収入の一部分も自分自身のためには使わなかったという面で、藤村の使い方は明らかに特異であった。そして、より一層特異だったのはその具体的な〈分配方法〉であった。藤村は印税収入を子供4人に分配する事情や経緯を小説『分配』（1927年8月発表）の中で詳細に述べている。次の第3章では小説『分配』における〈分配〉の内実について考えてみよう。

3. 銀行選択の謎 —『分配』の場合—

『分配』は一種の私小説である。藤村自身をモデルとする作品の中心人物「私」は、予期せぬ円本収入のために悩み始める。円本収入の正当性と使い道がその

苦悩の内容である。悩みの末、「長い苦勞と努力とから生まれて来たものとして、髪も白さを増すばかりのやうな私の年頃に、受けて疾しい報酬であるとは思はれなかつた」（309頁）と円本印税を自らの知的労働に対する正当な補償として規定した「私」は、自分の老後のための貯蓄という内面からの誘惑を断ち切って子供たちへの分配を決心する。ここで着目したいことは、自分を犠牲にして子供たちへの財産分配を決心した父親の自愛や献身ではあるまい。小説の叙述が最終的に収斂される、具体的な〈分配法〉をめぐる父親である「私」の思考パターンとしての経済意識と〈分配〉の詳細な内容についてである。（図－3を参照）

この四人の兄妹に、どう金を分けたものかといふことになる、私はその分け方に迷つた。（中略）私も実は、次郎と三郎とに等分に金を分けることには、すでに腹をきめてゐた。たゞ太郎と末子との分け方をどうしたものか。娘の方にはいくら薄くしても、長男に厚くしたものか。それとも四人の兄弟に同じやうに分けて呉れたものか。そこまでの腹はまだきまらなかつた。（315頁）

次男と三男に対する均等分配を決めた父親は次に長男と娘の末子に対する分配の比率について苦悶する。興味深いことは、父親の「私」の意識の中で分配率をめぐる他でもなく、長男と「末子」の両者が〈相関関係〉におかれていることである。つまり問題の本質は二者択一である。〈長子優待〉を堅持するのか、あるいは〈男女平等〉を実践するのかの問題なのだ。父親は結局、後者を選択する。ここから確認できるように、藤村には実際の収入〈分配〉とその経緯を記した小説『分配』を通して藤村自身の女性に対する理解と配慮をアピールしたがるような、ある種の欲望が感知される。

ところで、作家の経済意識という観点からみた場合、『分配』のなかで最も興味深いと同時に最も謎の部分は小説の後半部である。子供4人への均等分配を決めた「私」は次郎と末子をつれて、用件は二人に秘密にしたまま街に出かける。そして、〈分配〉を次のように実行に移す。

① そこはもう新橋の手前だ。ある銀行の前で、私は車を停めさせた。しばらく私達は、大きな金庫の眼につくやうなバラック風の建物の中に時を送つた。

『現金でお持ちになりますか。それとも御便利



(図-3) 堤寒三「漫画月評(1)」(『読売新聞』昭和2年8月5日)

なやうに、何かほかの形にして差上げるやうにしませうか。』

とそこの銀行員が尋ねるので、私は例の小切手を現金に換えて貰ふことにした。私が支払口の窓のところで受取った紙幣は、風呂敷包にして、次郎と二人でそれを分けて提げた。(320頁)

② 日本橋手前のある地方銀行の支店へと急いだ。郷里の山地の方にある太郎宛に送金するには、その支店から為替を組んで貰ふのが、一番簡単であり、便利でもあったからで。(321頁)

③ 私は京橋辺まで車を引返させて、そこの町にある銀行の支店で、次郎と三郎との二人のために五千円づつの金を預けた。兄は兄、弟は弟の名前で。私は次郎に言つた。

『これはいつでも引出せるといふわけには行かない。半年に一度しかさういふ時期は廻つて来ない。』(321頁)

④ 『末ちゃん、今度はお前の番だよ。』

さう言つて、私は家路に近い町の方へとまた車をいそがせた。(322頁)(傍線は発表者)

出版社から印税の2万円の「小切手」をもらった「私」は早速、〈分配〉を実行に移す。引用①～④は、父親が長男の太郎から順番に子供4人に2万円が分けられていく細密な過程の軌跡である。ここで極めて単純な疑問を抱かざるを得ない。なぜ「私」は最初の銀行で用事を全部済ませずに、異なる銀行を四箇所も転々しなければならなかったのか。さらに新橋から日本橋へ、また日本橋から京橋へ、最後には家の近所の銀行まで移動するこの複雑な銅線は果たして何を意味するのか。何のために父親はこうした〈銀行巡礼〉を

通しての〈分配の儀式〉を実行しているのだろうか。第4章ではこの謎について追究してみる。

4.〈金融恐慌〉と藤村の経済意識

第3章の引用①、「新橋」の「ある銀行」で「私」は2万円の「小切手」を全部「現金」に換える。ひとまず、この部分から疑問が抱かれる。なぜ、「私」は使いやすい手形や証書などの「便利な」「何かほかの形」ではなく、敢えて不便な「現金」の形で2万円全部を引き出しているのか。紙幣に換えた2万円が男二人が「分けて揚げ」なければならないほどの負担な重量であることを考えれば、わざわざ「現金」の形に換えたことには不思議な感じがする。この引用①部分の疑問は、まず事実関係のみ確認しておいて、他の疑問点と共に総合的に推論することにする。

引用①の「ある銀行」を出た「私」一行は、引用②の「日本橋手前」の「ある地方銀行の支店」に向かう。そこで「私」は田舎に居住する長男「太郎」分の分配金5千円の「為替」を組んでもらう。『藤村全集』収録された長男楠雄宛の藤村書簡によると、「ある地方銀行」は「愛知銀行」であることが確認される。その銀行が長男の居住地から最も近くて利用しやすい銀行ということで、それと同じ銀行の支店から組んだ「為替」を「太郎」宛に郵送することで分配を果たそうとする意図がみてとれる。⁷したがって、引用②における銀行の利用法は納得がいく。

最も謎は、引用③である。三番目に「私」一行が目指したのは「京橋辺」にある「銀行の支店」である。その銀行で「私」は、次郎と三郎分のそれぞれの5千円を「半年に一度しか」引き出せない種類の預金法で預けている。ここで疑問が湧く。なぜ「私」は、引用

①の銀行を使わずに、わざわざ「京橋」まで行って引用③の銀行を利用しているのか。引用②の地方銀行を利用したのは、長男に使いやすくするためという理由で理解できる。でも、ただ預金のためなら、小切手を現金に換えた引用①の「新橋」の「ある銀行」にそのまま預けてもいいはずである。どうして、そのようにしなければいけなかったのだろうか。

二つぐらいの推論が可能であろう。一番目は、利子の違い及び預金商品のメニューの違いを挙げることができる。つまり、引用①の銀行より引用③の銀行が利子率が高かったというケースが想定できる。さらに、引用③の銀行の高い利子率は「半年に一度しか」引き出せない、現在には存在しない広い意味の定期預金によって派生する、また、そうした預金メニューが引用③の銀行にはあって引用①の銀行にはない、ということ想定すれば、「私」がわざわざ引用③の銀行を使っていることの説明が成り立つかもしれない。

二番目に、利子の違いを想定しない場合でも説明がつく仮説がある。その仮説は、画家志望生である次郎と三郎にお金の使い道として「私」が〈留学〉を進めていることに基づく。つまり、息子たちが普段の些細な用事にお金を使うことはなるべく避けて、将来を準備する経費として5千円を使えるようにするため、利子は同じでも敢えて「半年に一度しか」引き出せない預金メニューを選んだということである。当然、この仮説においても、引用①の銀行にはそのメニューがなくて引用③の銀行には存在したという想定は必要である。しかし、二つの推論のいずれもその事実関係を確認することは難しい。その意味で、より信憑性のある論証のため、同時代日本の経済的コンテクストに対する具体的な検討の必要性が浮上してくる。

『分配』が発表された1927年、日本の経済は大きな危機的状況に直面する。いわゆる〈昭和恐慌〉と呼ばれた未曾有の〈金融恐慌〉が同年の3月から5月にかけて日本全域を襲ったのだ。その発端は、3月15日片岡大蔵大臣が渡辺銀行に関し失言するや全国的に銀行が取付をうけたことにある。その影響で、十五、近江その他の有力及び中小銀行多数が休業ないし倒産し、政府は急遽、対策として25日間の支払猶予（モラトリアム）を含む緊急勅令を發布するに至ったのである。⁸ 当然、消費者の投資心理は急激に萎縮し、相対的に安定的な大手の銀行をより優先する投資傾向が深化した。また不況の余波で出生人口が大幅に減少し、就職難のため実業者が続出した。こうした窮乏な社会像をリアリズム観点から捉えた小津安次郎の映画『大学は出たけれど』（1929年）は映画題目がそのまま当時の

有名な流行語になったほど、昭和恐慌から派生した経済難は深刻な状況であった。⁹

『分配』の「私」一行が訪れた諸銀行をこうした当時の経済的コンテクストに照らし合わせると、おそらく出版社側の取引相手であろう引用①の「ある銀行」は、当時の相次ぐ銀行倒産の最中、危ないとされていた銀行であったことが考えられる。だとすると、その銀行から小切手を「他の形」ではなく「現金」に換えてもらったことも、そのような観点から理解できる。その延長線上で考えれば、「私」が子供たちを連れてまで移動してわざわざ利用している引用③の銀行は、金融危機のなか、比較的信用度の高かった銀行であると推定することができるだろう。いつでも引き出せる普通貯金ではなく、「半年に一度」の引き出しという広い意味の定期預金でお金を預けている預金法も、この推定の有力な根拠になり得る。なぜならば、取り付け騒ぎ、もしくは倒産などが起こる危険性のある銀行ならば、半年の間に一回のみ引き出しができてそれ以上は制限されている預金法でわざわざリスクを背負いながらお金を預けることは、おそらく避けたはずだからである。したがって、引用①の銀行では単に小切手を現金に換えただけで、次郎と三郎の分配金を預金するには引用③の銀行を利用したことが理解されよう。なお、『分配』の題材となった藤村の印税受領が1927年3月の出来事であったことを考慮に入れば、『分配』の文脈から同時代の経済的コンテクストを読みとる、もしくは同時代の経済的コンテクストから『分配』の文脈を読解する、こうした推論はより一層説得力を増すと思われる。

その意味で、別の角度から興味深いのは引用④である。三カ所の銀行を訪ね終えた「私」一行は最後に「家路に近い町の方」へと向かう。「末ちゃん、今度はお前の番だよ」という会話の文脈と末子にも男兄弟同様に「銀行に預けた金の証書」が手渡されるその後の場面とを考え合わせると、「私」一行は、一人だけ残った末子の分配金を預けるため銀行に向かっていくことがわかる。つまり、その銀行は「家路に近い町の方」に位置するある銀行である。では、なぜ娘の末子の場合だけ、家から近いという銀行のロケーションが銀行選択の基準になったのだろうか。この選択の背景には、女性が男性に比べて経済的・社会的に弱者であると判断を基に、緊要な際に末子が容易にお金を引き出せるように配慮した父親の心が窺える。

以上の考察から見てきたように、小説『分配』の中の〈銀行〉利用は、〈金融恐慌〉という同時代の経済的コンテクストを細心に考慮した緻密で慎重な判

断を基に成されていることが確認できた。同時にこうした小説のエピソードは作家藤村の経済意識の反映でもある。しかし、こうした経済意識は、深度の差はあるにしろ、けっして藤村個人のみの突出したメンタリティーの表現ではなかった。たとえば、経済観念が希薄なことで有名だった自然主義作家の近松秋江さえも、手に入れた円本印税収入を管理することに悩んだ末、「私は安心の為に生命保険と銀行とは、日本国が滅びない限り、不払いや取付け騒ぎなどの有る気づかひの毛頭ない、勿体ないほどの銀行に頼んで置く」¹⁰とまで述べているからである。文学者は貧乏文士で経済意識そのものが希薄という、それまでの固定観念を徐々に修正しなければならない時期がいよいよ到来したのである。

5. むすびに 一経済的富と〈家庭〉の発見一

1910年代以降、日本は本格的な高度経済成長の軌道に乗り始めた。世界第一次大戦を経て一層膨れ上がった市場規模と再編成された経済構造の余波は1920年代に入ってから文学者たちの日常生活により深く関与するようになった。高度化した近代資本主義の剰余物が〈円本〉印税という形で文学者たちにも〈分配〉されたからである。〈円本〉は文学者内部の経済的二極化を加速化させる動因であったが、それでも〈円本〉現象によって文学者たちの経済意識が目覚めた事実は否めない。同時に「文学も大衆によって消費される商品」¹¹という〈文学の商品性〉に対する厳しい現実認識を文学者自らに刻印させる契機も提供した。

父親が予期せぬ相当な収入を子供四人に分配していく小説『分配』の世界は、一見、団欒な〈家族〉の風景そのものである。小説家として立身する前の貧乏な時代、三人の幼い娘を立て続けに亡くした藤村からすれば、その世界は彼が長い間夢見てきた、安定と平穏に満ちた〈家庭〉のイメージの顕現かも知れない。だが、極めて平坦に見えるその世界の裏側には現実的過ぎる生々しい同時代の経済的コンテクストが投影されていることを見抜くことは肝心である。こうした〈物質性〉と〈精神性〉も関ぎ合いとも言える同時代の〈経済状況〉と一作家の〈家庭風景〉との鮮烈な対比こそが、小説『分配』の隠された内実だったのだ。そして、藤村個人からすれば、それは子供たちの独立、その次の再婚までを念頭に置いた、新しい〈家庭〉の構築に向けての周到綿密な新生活への欲望の顕れでもあったのである。

注

* 本稿に取り上げた島崎藤村の文章は、『藤村全集』（筑摩書房、昭和四二年六月）による。なお、本文のすべての引用において旧字体の漢字は新字体に改め、ルビは適宜省略した。

- 1 北村透谷『厭世詩家と女性』（『女学雑誌』1892年2月）。
- 2 三輪良一、権赫基訳『日本経済史—近代と現代—』（宝庫社、2004年）、167頁。第一次世界大戦直後の1918～20年の日本の年平均国民総生産は、大戦直前の1911～13年に比べて実質基準（物価上昇も考慮）で1.4倍も拡大した。
- 3 塩沢実信『昭和ベストセラー世相史』（第三文明社、1988年10月）、12～13頁。
- 4 小田光雄『書店の近代—本が輝いていた時代—』（平凡社、2003年5月）、139頁。
- 5 永井荷風『摘録 断腸亭日乗（上）』（岩波書店、1987年7月）、169頁。
- 6 30～40円という当時の大学卒初任給は、栗原幸夫「大衆化とプロレタリア大衆文学」（池田浩士編『〈大衆〉の登場—ヒーローと読者の20～30年代』インパクト出版会、1998年1月）、213頁によるものである。一方、吉野俊彦「断腸亭エコノミック日乗（14）円本ブーム（上）」（日本放送出版協会編『放送文化』第40巻、1997年10月）によると、「第一次大戦中の大幅な物価上昇に追隨して増額され」（174頁）たため、この時期、大学卒の初任給が50円から70円に達していたという見解もある。ともあれ、いずれにしろ、当時の経済レベルからいって、2～5万円という金額が大変な大金であることには変わりがない。2～5万円の現在の金銭価値は、「当時に比べて現在物価は実勢で約一万倍程上昇している」（吉野俊彦「断腸亭エコノミック日乗（15）円本ブーム（下）」（『放送文化』第41巻、1997年11月）、178頁）状況を勘案すると、約2～5億円ほどの大金だからである。
- 7 1927年3月31日付の長男楠雄宛の藤村書簡、『藤村全集』第17巻（筑摩書房、1967年5月）、433頁。
- 8 金融恐慌が起こった昭和二年を境として日本の銀行の力学構造に大きな地殻変動があった。後藤新一『本邦銀行合同史—補充改訂版』（金融財政事情研究会、1973年7月）、180頁によると、恐慌前の1926年には、預金総額の面で、全国の普通銀行にいわゆる5大銀行（三井、三菱、住友、安田、第一）が占める割合が24.3%であった。それが1927年においては約7%も上昇した31.2%になったのである。それによって、二流の有力銀行の弱小銀行の淘汰が進行し、5大銀行への集中度が高まり、大銀行の独占体制がほぼ確立する結果となった。こうした事態を招いた動因の一つは、『分配』の「私」の慎重な銀行利用に窺えるごとく、恐慌によって引き起こされた消費者の不安心理がより大きく安全な銀行を好む傾向につながったことである。
- 9 清水勲編『漫画に描かれた明治・大正・昭和』（教育社、1988年）、179頁。
- 10 近松秋江「特別当座預金帳」（『中央公論』1927年5月）。
- 11 山本芳明『文学者につくられる』（ひつじ書房、2000

年)、300頁。

イ ジヒョン／淑明女子大学校 日本学科 副教授